



Title	ペット喪失直後に生じる悲嘆反応の頻度と程度：疫学的研究を目指した予備調査より
Author(s)	木村, 祐哉; 川畑, 秀伸; 前沢, 政次
Citation	平成20年度日本獣医師会学会年次大会. 平成21年1月22日～平成21年1月24日. 盛岡市
Issue Date	2009-01-23
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/35505
Type	conference presentation
Note	要旨の出典：平成20年度日本獣医師会学会年次大会講演要旨集. 2009. p.301
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	kimura-1_abst.pdf (要旨)



[Instructions for use](#)

ペット喪失直後に生じる悲嘆反応の程度と頻度 ～疫学的研究を目指した予備調査より～

木村祐哉, 川畑秀伸, 前沢政次
北海道大学大学院医学研究科医療システム学分野

2009.1.23

【背景】ペット喪失後の飼主に生じる悲嘆は広く注目されているが、その実態について客観的に評価した研究は数少なく、今後の獣医療における適切な対応を検討するためにはまずその現状を知る必要がある。そこで本研究では、ペット喪失直後の飼主における精神的健康状態に関する疫学的な調査の実施を試みた。

【方法】札幌市動物愛護センターの火葬受付に調査用紙を留置し、対象となる飼主に回答を呼びかけた。調査内容には調査対象者の属性や死別状況に関する設問を含む基本調査に加え、ストレスとなる生活上の出来事（社会再適応評価尺度/SRRS）、家族機能（FACESKG-IV）、精神状態（CES-D, GHQ28）などの各評価尺度を採用した。調査対象者には回答後2週間以内に調査用紙を返送するように求めた。本調査は倫理委員会の承認の元で行われ、調査対象者への配慮から、医師による健康相談およびペットロス・ホットラインの紹介、調査協力撤回届を調査用紙に同封した。

【結果】対象となった50名中18名から調査用紙が返送された（回答率36%）。CES-DとGHQ28の回答に不備がなかったのは16名で、そのうちで抑うつ状態あるいは精神疾患の疑いがあると判定されるのはCES-Dで6名、GHQ28では7名に及んだ。ペットが亡くなったの回答から0-44日前（中央値4日）だった。ペットの死“以外”の原因を取り除くために、SRRSが100点以上の2名は除外した上で各要因との関係を調べると、年齢や家族関係、飼育環境、形見の存在などの影響を受けていることが示唆された。

【結論】死別直後のうつ症状は正常な悲嘆反応の範疇に含まれるものであるが、実際にペット喪失直後の飼主が抑うつや精神疾患を経験していることが明らかとなった。この結果はペット喪失後の悲嘆とその対応について検討するために重要な所見である。ただし本研究は比較的規模が小さく断面的であるため、解釈には注意を要する。今後、悲嘆に影響を及ぼす諸要因について結論を得るには、より大規模な前向き調査が不可欠であろう。